

哲學研究

第二百三十二號

第二十卷
第七冊

プラトーンに於ける知識への道 (承前)

——「テヘアエテーツス」研究——

長 澤 信 壽

七

然らば我々は有謬の臆斷を有たないであらうか。人は自分が知つてゐるものを知らないものであると臆斷する筈はないと言はれた時、我々の一致はたしかに正しくはなかつた。蓋し人は何等かの仕方では有謬の臆斷を有つからである。然らば有謬の臆斷は如何にして起るか。プラトーンは、此れを比喻によつて心理學的に説明してゐる。我々のプシユクヘーの中にムーサイの母「記憶の女神」(Mnemosyne)の賜

物であるところの臘板がある。(二) 此の臘板の大小の形狀や性質は人によつて夫々異つてゐる。さきに「知つてゐる」と「知つてゐない」との中間にあるものとして除外せられたところの「學ぶ」及び「忘れる」は、此の臘板の比喻によつて説明せられる。人が感覺し若しくは思考するものを記憶しようと欲する時、人は此の臘板の上に感覺や思考 (*enrolia*) の極印をといめるのである。そしてといめられた影像 (*eidos* *λογος*) が殘存してゐる間、人は記憶と知識とをもつてゐるが、此の極印が拂拭せられることが即ち忘却である。さて、今、此の臘板の上に印跡を有つてゐる者が、新たに、感覺から極印を受ける場合、此の印跡と極印との結合の如何によつて、有謬の臆斷が生ずるのである。プラトーンは爰に頗る多岐な結合の場合を述べてゐるが、結極、我々はそれを次のやうに單純化することが出來よう。(一) 私がテヘオドロースとテヘアエテイトスを、以前から知つてゐて、眼前に見ることなしに、考へる時、錯誤は起り得ない。(二) 私が一方しか知らない場合に、その人を、私の知らない他方と錯誤する筈はない。(三) また知りもせず眼前に見もしない場合にも、錯誤は勿論起らない。(四) しかし錯誤の起るのは、プシユクヘーの中にある印跡に感覺の極印が加はる場合だけである。即ちテヘオドロースとテヘアエテイトスとを知つて居り、此の二人の感覺的極印をプシユクヘ

「の中に有つてゐる私が、遠くから不充分に二人を見る時、二人を再認するためには、*Evá neútrou ávayvápias* (193c)、新しい極印を前の該當すべき印跡に結合しようとして、それを誤ることがある。それは恰も人が靴の左右を取り違ひてはくやうなものである。それ故に我々が再認を誤るために、有謬の臆斷が生ずるのである。再認とは現實の感覺的事實を、我々がプシユクヘー中に有つてゐる印跡(知識)によつて解釋することである。而して此の解釋の誤りによつて臆斷が有謬となるのである。感覺そのものに誤謬があるのではない。それ故に我々の結論は「有謬の臆斷は感覺相互の關係のうちにも、思惟のうちにもあるのではなく、感覺が思惟と結合することのうちにある」(195c—e)と言ふことになる。⁽¹⁾反之、思惟が感覺を正しく解釋するならば、それは眞なる臆斷とならなければならぬ。そして眞なる臆斷は、我々の假定に従ふと、知識であつた。ところで感覺が、それ自體のうちには誤謬をふくまないとしても、知識であり得ないことは、既に論證せられた。然らば思惟そのものの純粹な活動が誤謬を犯さないであらうか。

(1) *Aristotelis de Anima*, II, 424 a 17. に於ける感覺の説明も亦臆板の比喩を用ひてゐるのみならず、プラトーンに此の個處と符節を合してゐることは、既にポニーニツが指摘してゐる(*H. Bonitz, Platonische Studien*, 2. Aufl., S. 57; *Ann.* 14.)⁹。

してこれはまた中世に於ける「感覺的」并に「知性的」種の教説の遠き源泉となつたと言ふ (A. E. Taylor, op. cit., p. 341.)

(二) 當篇の前半では感覺は眞偽の外にあるとせられた。

然し我々が多少日常の經驗を反省してみると、思惟そのものの純粹なる活動が誤謬を犯さないとは主張せられない。數并に數相互の關係を考へる時、我々は全く感覺を用ひずに、たゞ専ら思惟を用ゐる。その場合に我々は誤謬を犯さないであらうか。五に七を加へればその和は十二であるが、これを十一であると言ふ者がないとは言はれない。此の加算せらるべき數が大きくなれば更に一層誤謬を犯し易くなるであらう。其れ故に我々は爰に於ても、誤れる臆斷の存在を否定するか、さもなければ同じ人が同一の對象を知つてゐて同時に知つてゐないことを認めると言ふアポリアに遭遇するであらう (190b-c)。プラトーンは此のアポリアを切り開くために、先づ「知る」(τὸ ἐπινοῦσθαι) とは一體如何なることを意味するものであるかを判然と規定しようとする。通例「知る」とは「知識をもつてゐること」「知識の現有」(ἐπινοῦσθαι) であると言はれてゐるが、しかし此の定義は修正せられて「知識の所有」(ἐπινοῦσθαι) と言はるべきである (197a-b)。「現有」と「所有」とは同一ではない。⁽¹⁾ 我々が外套を所有してゐることとは、現實に我々がそれを着用してゐることを意味しない。澤

山の鳩を捕へてそれを鳥籠に入れておく人は、鳩を所有してはゐるが、現實に鳩をもつてゐるのではない、しかしその人には、自分の欲するまゝに鳩を捕へて、持つてゐたり放したりする力がある。この區別を知識の問題に當て嵌めて見るならば、人間のブシユクヘーは鳥籠に、人が獲得する知識は鳩に、比せられる。人は成長するにつれて、ものを學び或は發見するが、その知識を此の籠に入れ、かくして知識を所有するのである。このやうにして人はブシユクヘーの籠の中を自由に飛翔してゐる知識を捕へることが出来る。これが知識の現有である。

(一) 此の現有と所有の區別はアリストテレスによつて「現勢」(ἐνέργεια)と「潛勢」(δύναμις)とに發展せしめられた。

さて、算術に長けてゐる人は、算數に必要な知識を自分のブシユクヘー中に所有してゐるのであるから、或る意味では一切の數の知識を所有してゐると言はれることが出来る。しかし算數を行ふ個々の場合に、自分が知つてゐる數を計算するに當つては、恰も算術に全然無知な人と同様に數へなければならぬ。ところで「計算すること」(τὸ ἀριθμεῖν)を「探ねる」(τὸ σκοπεῖν)と同じである。それ故に知識の場合に於ても、鳩の場合に於けると同様に、人は先づ所有してゐない知識を所有するため、次には既に前から所有してゐる知識を更に現有するため、二重に知識の狩をなさなけ

ればならない。此の第二の狩に於て、我々が捕へようと欲する十二の數の知識を捕へないで、十一の數の知識を捕へることがあり得るであらう。このやうにして人は有謬の臆斷を有つのである。それ故に我々は既に知識を所有してゐるかも知れないが、我々のプシユクヘーの中を自由に飛翔してゐる知識を現有しようとする時、我々が捕へようと企圖したものを捕へれば、我々は「誤謬を犯さず存在を臆斷し」(*dephorōn te kai tū buta doxōsēu*) (199 b) たのであるが、反對に我々が企圖しなかつたものを捕へれば、我々は有謬の臆斷をもつたのである。故に眞なる臆斷と有謬なる臆斷とがここに區別せられなければならぬ。

かくして我々は知つてゐて同時に知らないといふ矛盾律を犯すことなく有謬の臆斷を説明し得たかに見えるが、しかし爰に一層困難なアポリアが起つて來る。若し「知識の取り違ひ」(*h' tōu ēstathmōu heterōnomi*) (199 c) をもつて有謬の臆斷となすならば、第一に、何ものかに就いての知識を有つてゐる者は、彼の知識の爲めに、そのことを知らず、第二に、此れを彼れと、彼れを此れと臆斷する人は、その人のプシユクヘーには知識があるのに、一切を認識しないことになる。要約すれば有謬の臆斷が知識の所由によつて生ずることになり、その結果として無知アゲイイが知(gnōnai)の原因であり、知識が

無知 (*ἀγνοῖαν*) の原因であることになる。ところでプシユクヘーの中を飛翔してゐる鳩を知識と無知とに區別し、有謬の臆斷を有つものは、此の無知を捕へたものであるとなすならば何うであらうか。無知を捕へた人も、自分では、無知を捕へたのではなく、知識を捕へたのであると思ふに相違ない。しかし知識と無知識 (*ἀγνοῖαν καὶ γινῶσκῶν*) とを區別することが出来る人ならば、成る程有謬の臆斷を有つ筈はなからうけれども、その代り、そのやうな人は、却つて、知識と無知識とを共に知つてゐる人でなくてはならぬ。従つてこれは「知識と無知識との知識」 (*ἐπιστάτην τῶν ἀγνοῖῶν καὶ γινῶσκῶν*) (*σοφία*) の存在を先行條件としなければならぬであらう。さうだとすれば、我々は少しも前進することなしに「數限りなく、同じ軌道を循環し」 (*ἀόριστος*) なければならぬまい。このやうにして、知識の本質 (*τὴν φύσιν, ἔσθιν*) を把捉するよりも前に、有謬の臆斷を知らうとした企ては結極失敗に終つた。

此の有謬の臆斷の本質を規定して、それを眞なる臆斷と區別しようとする企ては、可なり長い對話 (187b—200d) であつて、その終りに臨んでソークラテースは「再び始めから」 (*ἀπὸ ἀρχῆς*) 眞なる臆斷が知識であるか否かの研究に着手することを提案してゐる。ところが此の有謬なる臆斷の研究には、眞なる臆斷としての知識の吟味が動機とな

つたのであるから、謂はば一つの挿話とも見られるであらう。そのために解釋家の間には、有謬の臆斷に關する此の枝論と、それに比して極めて短いが而も本問題を形成してゐるところの、眞なる臆斷としての知識の吟味との間の連關に就いては異論があるが、私は今それに觸れることを控へたい。然し有謬の臆斷の問題に立入るところは、心理學的論究の機會をプラトーンに與へ、彼にとつては、此の論究はそれ自身一つの價值をもつてゐたに相違ないと言ふ、ポーニツツの見解は、極めて正當であるけれども、次第に精緻になつて遂に我々が「ソプヘスタ」に於てその典型的なるものを見るところの、また「多くの」人々からは無駄話と言はれてゐる「バルメニデース」後半の「準備的訓練の方法」を想ふ時、プラトーン的方法の發展上よりしてポーニツツの主張以上のものがこゝに含まれてゐると思はれる。臆斷の問題はプラトーンの知識論の謂はば一つの影であつた。そして有謬の臆斷は眞なる臆斷の對立者として常にそれに纏ひついてゐたのであつて、假令こゝでは成功しなかつたとは言へ、プラトーンはそのその全貌をはつきりと捉へようと努めたのであらう。「快樂」に對比せられてゐる「アヘレーブス」の臆斷の議論を見る時、人はプラトーンのこの意圖を安心して主張し得るであらう。そこに於ては臆斷は一つの存在とせられ、存在と性質 (Toion) とが

區別せられてゐる。存在は常に何等かの性質を伴ふものであつて、従つて臆斷も亦有謬か眞實かの性質を伴はなければならぬ。そして臆斷が有謬の性質を伴ふのは快樂によるとせられてゐる。「プロレープス」の此の個處は「快樂」に就いて語られてゐるのであるが、ソークラテースは臆斷の有謬と眞實との性質に就いては、それが既に解決せられたものとして對話を運んでゐる。

(一) Parmenides, 125d.

(11) Bonitz, Platonische Studien, S. 85.

(111) Philibus, 37a—38a.

さて、知識が臆斷であると言ふ定義を吟味するに當つて、それを有謬なるものと眞實なるものとの二つに分割することは當然なる假定として承認せられ、第三の臆斷は考へられてゐなかつた。それ故にテヘアエテイトスが臆斷をもつて知識であると定義した時、彼は有謬なる臆斷を除き去つた眞實なるものを意味してゐたのである。ところで有謬なる臆斷は、上來述べたやうに、吟味せられたから、今やテヘアエテイトスが知識と同じものであると主張する臆斷が、眞に知識であるか否かを見なければならぬ。先づ「眞實なる臆斷」(καταληκτικὸς ὁρῶν)と呼ばれてゐるものは、プラトーンの語

るところに従ふと、知慧に於て優れてゐる人々、即ち所謂修辭家 (*ῥητορ*) や法律家 (*δικασ-
τευός*) の「術」(*τέχνη*) のことである (201b)。此の術は裁判官を説服し、彼に臆断をもたし
めるために用ひられるものであつて、人を「説服すること」(*τὸ πείθειν*) に成立する⁽¹⁾。事件
の目撃者ではない裁判官が「聞知によつて」(*ἐκ ἀκοῆς*) 判断しながら、正しい判決を下し
たならば、彼はそれを「知識なしに」(*σοῦχο*)、眞實なる臆断をもつてなしたのである。け
れども眞實なる臆断と知識とが同じものであるならば、何れか一方を有する者はま
た他方をも有するものでなくてはならないから、裁判官が正しく臆断しながら知識
をもたないことは不可能な筈である。然るに彼は「知識なしに眞實なる臆断をもつ
が故に、知識と眞實なる臆断とは異つたものでなくてはならぬ。

(一) 修辭術が「説服」を用ひて人に「所信」——これは臆断と同義である——を起させるものであると言ふ考は、「ゴルギアス」
(454d—455a) にも見られ、ここに於てもそれは知識と峻別せられてゐる。

このやうにして第二の定義も亦否定的結果に終つた。嚮きにも述べたやうに、臆
断も存在するものを内容とする以上、それと知識との相違はその内容に存するので
はなくして、起因第二の定義では眞實なる臆断は「説服」から起つた」と基礎づけにな
くてはならぬ。前期の諸對話篇に於ても、知識と眞實なる(或は正しい)臆断とは、或る

點では同じもの乃至一致するものとせられてゐた。「メノー」によれば實踐的立場からは両者は同一であつた。^(二)そしてプラトーンにとつては、行爲も亦存在の一種であつた。^(三)而も尙ほ知識の方が正しい臆斷よりも尊重せられるのは何故であるか。眞實なる臆斷は我々のうちにとゞまつてゐる間、一切のものを善となし美となすが、しかし長く止まらうとはせず、人間のグシユクヘーから逃れようとする。それ故に人がそれを「原因の推理」(αἰτίας νοητικός)によつて縛るまでは餘り價値のあるものではない。我々がそれを縛ると「始めには知識となつて、次いで永續する」。^(三)それ故に知識と正しい臆斷とは種類が異つてゐる。「メノー」の此の考は「饗宴」を経て「國家」まで續いてゐる。「ロゴスを與へることの出来ない」(καὶ ἀνευ τοῦ ἔχειν λόγον δοῦναι) 正しい臆斷は知識ではないけれども、また無知でもない。何となればそれは「ロゴスを缺くもの」(ἀναρ-
 ρου ἄργητα) であるから知識ではないが「存在を(偶然に)捕へてゐるもの」であるからま
 た無知でもない。故に眞實なる臆斷は知識と無知との中間にあるものである。^(四)眞
 實なる臆斷が固定性を缺き、永續性を有たないのは、此の中間にあつて「束縛」を有たぬ
 ことのためである。「メノー」で「束縛」と言はれてゐるものは、眞實なる臆斷を知識とし
 て基礎づけるものを意味するのであつて、ソークラテースは此れを「想起」であると言

つてゐる。^(五)「眞實なる臆斷は、問ひに呼び醒まされて、知識となる」^(六)。正しい臆斷は想起を缺くが故に知識と區別せられるのであつて、想起が形相の最も純粹なる認識であつたことは言ふまでもない。

(一) Meno, 79 c.

(11) Cratylus, 386 e ἢ οὐ καὶ αὐταῖ ἐν τῷ εἶδος τῶν ὄντων εἴη, αἱ ἠρακῆες ; — Πάνυ γε καὶ αὐταῖ.

(三) Meno, 98 a.

(四) Symposium, 202 a.

(五) Meno, ibid.

(六) Meno, 86 a.

其れ故に「メノ」の原因の推理とは形相を思惟することであつて、知識は形相を思惟し、形相にその基礎を有するが故に、固定性、永續性を有するが、之に反して眞實なる臆斷は、形相の思惟とならざる限り知識とはなり得ないものである。「饗宴」に於ける「ロゴスを與へること」は「メノ」の原因の推理と同じものを意味する。「饗宴」の思想^{ゲテンケンゲン}過程は「正しい臆斷が」ロゴスを缺くものであるに反して、知識は「存在を捕へるもの」であることを教へる。此のことから我々は「ロゴスを與へる」と言はれる時、そのロゴスが存在のロゴスを意味するものであると結論することが出来る。ところが此の存在

とは形相であるが故に、存在のロゴスはまた形相のロゴスでなくてはならぬ。我々の解釋は「我々が問ひ且つ答へて、その存在のロゴスを與ふるところの存在性そのもの」として、形相が語られることによつて、一層確實にせられるであらう。「プハエド」では問ひ且つ答へて形相の存在のロゴスを與ふることは、また簡單に「思惟の推理によつて」(τῶν τῆς δεικτικῆς λογικῆς)とも言はれてゐる。(三)此の「思惟の推理」とは「メノ」の「推理」であつて、思惟の推理によつて形相を把握することが知識でなければならぬ。「知識を有つてゐる人は、彼が知識を有つてゐるそのものに就いて、ロゴスを與へ得るか、得ないか——與へ得なければならぬ」(三)従つて知識にはロゴスが伴はなければならぬ。換言すれば個物の存在の原因として把握せられる形相を、思惟によつて推理することが伴はなければならぬ。ところで正しい臆斷が「問ひに呼び醒まされて知識」となる時、若しくは想起に束縛せられて知識となる時、正しい臆斷も亦知識の有する上記の性格を有たなければならぬ。それ故にプラトーンの前期にあつては、ロゴスを伴ふ眞實なる臆斷は知識であると認められてゐたやうに思はれる。しかしこのことは知識が一般にロゴスを伴ふ眞實なる臆斷であると言ふ意味ではない。彼はロゴスを伴ふ臆斷から知識に至る「一つの通路」を「一つの方法的移行」(une transition

méthodique) を示さうとしたに過ぎないのであつて、ロゴスを伴ふ眞實なる臆斷によつて知識を定義し得るとプラトーンが認めてゐたとは思はれない。(四) 知識と眞實なる臆斷とは類に於て異なる二つのものであるが故に、類の變化を條件とせざる限り、一方から他方に至る途はあり得ないであらう。前期プラトーン哲學は此の點が極めて曖昧であつたが、形相の離在的存在と想起説の後退に伴つて、彼は新たに此の問題を反省する必要を認めたのであらう。知識の第三の定義はプラトーンの此の探究である。

(一) Phaedo, 78 d.

(二) Phaedo, 79 a. *πρότερον* に *καθ' ἑαυτὴν* (ad loc.)¹⁾ については *ἐν αὐτῇ* と *ἐν αὐτῷ* との區別はなく、思惟 (thinking) を一般的に意味し得る。

(三) Phaedo, 76, b.

(四) Cf. Diès, *Autour de Platon*, tome 2^e, p. 468 f.

八

テヘアエテイトスが第三の定義としてあげたものは、彼が曾て或る人から聞いた説である。それによると「ロゴスを伴ふ眞實なる臆斷は知識であるが、ロゴスのないものは知識の外にある、またロゴスを有たないものは知識されないもの (*οὐκ ἐπιστητά*)

——さうその人は名づけて——であるが、ロゴスを有つものは知識されるものであると言つたのです[301c]。ソークラテースはテヘアエテートスの此の新らしい定義を、夢の中で或る人から聞いたと言ふ説によつて解釋する。此の第三の定義が第二の定義と相違してゐる點は「ロゴスを伴ふ」(μετὰ λόγον)ことだけであるが故に、問題は此のロゴスの解釋でなくてはならぬ。臆断はロゴスを有つことによつて「知識せられるもの」即ち知識の對象となるが、ロゴスを有たぬものは知識の領域から除外せられる。こゝではロゴスは人が與へるものではなくして、知識の對象が有たねばならぬところの一つの性格として、對象的に理解せられてゐる。此のやうな對象的なロゴスの本質をプラトーンは「名前の組合せ」(ὄνοματῶν συντάξις) (202 b)と呼んでゐる。「知識せられるもの」とは、固より、かゝるロゴスを有するものであるが「反之」知識せられざるもの」とは、ロゴスを有せざる「始源的な基本」(πρῶτα στοιχεῖα) ⁽ⁱⁱⁱ⁾である(201 e)。此の「基本」はあらゆるものを構成してゐる要素であるが、それ自體では名前(ὄνομα)を有つてゐるだけで、存在するとも、存在しないとも總じて如何なる述語をも、それに附加せられざるものである。「クラテュルス」で語られてゐるところに依れば、基本とは、我々がロゴスを能ふ限り分析して達するものである。「若し我々が他のどんな名前か

らも綜合せられてゐないものに達したならば、我々は基本に達したのであつて、これ(の由來)を他の名前に關係づける必要はない、と當然言ふことが出来る⁽¹¹⁾。これに我々が如何なる述語を附加しても、その述語は基本とは異つたものであるから、それは最早基本の性格を失つて、綜合せられたもの(τὰ……συγγεμένα) (202 b)となる。それ故に基本はたゞ感覺せられる(αἰσθητά)だけであつて、ロゴスがなく(ἀλογα)知られもしない(ἄγνωστα) (202 b)。之に反して此の基本から「結合せられたもの」(συνλαβή) (即ち綴られたもの)は、知られ、表現せられ、眞實なる臆斷の對象ともなる。それ故に人は何等かの對象に就いて眞實なる臆斷を有つても、「ロゴスを與へ且つ受け取る」(202 c)ことが出来なければ、その人はその對象に就いて知識を得ることは出来ないであらう。

(11) σύνγνωσις は「テヘアエテーツス」では三つの意味で用ひられてゐる。私はその第一の總稱的意味として「基本」と言ふ譯語を與へた。第二には綴に對する「文字」(複數)の意味で用ひられてゐるが、第三には「音調」も ὁμοφωνία と稱せられてゐる (202 b)。

(11) Cratylus, 422 b.

此の第三の定義、即ち、テヘアエテーツスが或る人から聞いたと言ひ、ソークラテースが夢で見た人に聞いたと言ふ説は、アリストテレーヌが「形而上學」で「アンテイストヘネース派の人々並にそのやうな教育のない人々」のものとして擧げてゐる説と酷

似してゐるために、これがアンテイストへネースの所説であつてプラトーンは彼を批判したのであると、しばしば主張せられた。^(二)しかし他方に於ては *στοχεῖα* 及び *ἑπι-ναβαί* がピュタゴラス學派の特徴を示す用語であること、その他の理由からして、その學派に屬する人乃至その影響を受けた人の説であるとも主張せられてゐる。^(三)しかしそれが誰れによつて唱へ出されたものであるか、唱へられた説をプラトーンがそのまゝ爰に述べたかどうか等々のことは、新資料の提供せられざる限り、絶望的に明らかになし得ないであらう。「だから我々はそれを取つて、いや寧ろ我々自身を取つて吟味しよう」(203a)。

(一) Met. viii (H), 1043 b 24ff.; Cf. iv (Δ), 1024 b 32 ff.

(二) 例へば Gomperz, Gr. Denk II, 4. Aufl. S. 436; Kaeder, Pl. ph. Entw. S. 290 f. (但しプラトーンは部分的にはアンテイストへネースと一致したが、前には氣がつかかなかつた困難を、後に發見したやうに思はれるとなす)。Horn, Platonstudien, Neue Folge, S. 254 f. 及び他 Bonitz, op. cit. Ross, Arist. Met. ad loc. 等々。

(三) 例へば Campbell, The Theaetetus, xxxix; Burnet, Gr. Ph. p. 252; Taylor, Pl. p. 345 f. n. r. テイラアはヒッパソーントメ (*Hipparcus*) の説となすが、これはアンテイストへネースとなすものより以上に信じ難い。

さてプラトーンは此の説を文字と綴との關係によつて批判する。さうすると綴にはロゴスがあるが、それを構成してゐる文字にはロゴスがないことになる。例へ

ばソークラテースの最初の綴 $M\Omega$ にはロゴスがあるが、文字 M と Ω とにはそれぞれ「シグマ」及び「オーメガ」と言ふ名前はあるが、ロゴスはなないことになる。 M は齒音であると言ふ以外、それを更に要素に分析することは不可能である。ところで綴一般に総合せられたものも同様は、(一)文字(基本)の總體 ($\tau\alpha\ \tau\alpha\upsilon\tau\alpha\ \sigma\tau\omicron\upsilon\chi\epsilon\iota\alpha$) であるか、それとも(二)それが総合せられた時に生じた何か統一ある形態 ($\mu\iota\alpha\ \tau\alpha\upsilon\tau\eta\ \iota\delta\epsilon\alpha\iota$) (203c) であるか、でなくてはならぬ。第一の場合には綴は一定の順序に置かれた基本即ち文字の總體と言ふことになるが、 $M\Omega$ と言ふ綴を知ることがシグマとオーメガと言ふ文字を知ることには他ならぬが故に、此の文字の何れの一つをも知らぬものが兩者 ($\alpha\mu\phi\omicron\tau\epsilon\pi\alpha$) を知ることになる。これは甚だ不合理 ($\alpha\lambda\omicron\gamma\omicron\upsilon\alpha$) である。故に総合せられたものの知識をもつものは、それに先立つて基本(文字)を知つてゐなければならぬ (203d¹)。第二の解釋に従へば、綴は文字から成り立つた一つの種類ではあるが、それ自身が統一ある形態を有ち、文字とは異つたものである (203c)。従つて綴は分割を許さず、部分をもたないところの一つの單位でなくてはならぬ。さもなければそれは部分即ち文字とは異つた類ではなくして、部分の總體となり、第一の場合と同じ結果を招致するであらう。このことは總體 ($\tau\alpha\upsilon\tau\eta$, $\tau\alpha\upsilon\tau\eta\alpha$) と全體 ($\delta\alpha\upsilon\tau\eta$) 並に部分の關係に就いて見れば、一層

明瞭になるであらう。總體と全體とは次の二つの點が共通してゐる、即ち(a)此の二つの概念の中には部分が區別せられること、(b)従つて兩方の概念とも部分の總體であることである。このことは、總體に關しては、明らかであるが、また全體に就いても言はれるであらう。何故と言ふに部分と全體とは相對的概念であるが故に、部分と言はれる時には、常にそれは「全體の部分」(204c)でなくてはならぬ。而も全體とは、プラトーンの定義に従へば「それにも缺けてはゐないものである」(205a)。従つて全體とは部分の總體である、それ故に此の兩概念は「同時に同じものから成つた同じものである」(Ibid.)。然るに若し綴は文字の總體とは異つたものであるとするならば、それは部分を有たないところの、従つて「分割することの出来ない統一な形態」(205c)でなくてはならぬ。綴が部分をもたない一つの形態であるとするならば、それは全く文字と同類になるであらう(205c)。ところが嚮きに一致せられたところによれば「形態が一つであつて分割の出来ないもの」(μονοειδὲς τε καὶ ἀμερίστου)はロゴスをもたず、知識せられないものであつた。其れ故に綴も、文字と同様に、分割を許さぬ一つのものであるならば、知識の對象とはなり得ないであらう。しかしまた第一の解釋に於て言はれたやうに基本(文字)が綜合せられたものよりも前に知られてゐな

ればならぬものであるならば、文字も綴も共に知られるものでなくてはならぬ。我々の少年時代の學習の經驗は、我々が先づ文字を學び、それによつて綴を辨別し、かくして學問に達したことを物語るであらう。それ故に綴は知られるが、それを構成してゐる文字は知られないと言ふ説は全く維持せられない。

(一) プラトーンは $\epsilon\iota\sigma\tau\epsilon\sigma$ (εἶδος) は $\epsilon\iota\sigma\tau\epsilon\sigma$ と $\epsilon\iota\sigma\tau\epsilon\sigma$ とを區別してゐない。

上來述べた基本(文字)と綜合(綴)との知識論上の關係を通じて、プラトーンは、その何れにもせよ知識の對象とはならぬと言ふ時には、それが「形態が一つであること」、「分割を許さぬこと」、「統一性を有すること」等の概念をその論據としてゐた。そしてこれは此の證明の出發に於て基本が有する特質とせられたものであつた。之に反して基本(文字)が知られ得るといふ證明に於ては、綜合せられたものが有するところの知られ得る性質を基本にも附與してゐる。そしてこれは結極對象が一つの形態ではなく、綜合せられたものである限り、また分割を許すものであるといふことに歸するであらう。プラトーンはこれを「ロゴスを與へ且つ受け取る」(202c)とも言つてゐる。ところで此の「形態が一つである」(μονοειδής)と言ふ言葉は、プラトーンが前期に於て(例へば「饗宴」211b, 「パキテデー」78d, 80b)形相を特質づけてゐた徵標である。此

の場合に於ては形相は想起の内容として眞なる認識の對象となつてゐた。然るに今や「テヘアエテーツス」に於ては基本が知識の對象とはならぬことの理由として、不可分割性 (*ἀμερίτων*) と並べられてゐる。更に形態が一つであるところの形相は全く感覺の對象とはならぬものとせられてゐたが、こゝに於ては *μορφῆς* な基本は却つて知られることは出来ないが、たゞ感覺せられるだけである (*μορῆ*) とせられてゐる。即ち *μορφῆς* のみに就いて言へば、前期にたゞブシエクヘーの理性的認識しか許さなかつた此の性質は、今や我々がその存在を肯定することも否定することも出来ない感覺的對象に移された。而して此のやうな對象がロゴスを有たぬもの、即ち *εἶδος* であるに反して、ロゴスを有するところの知られ得るものは部分の綜合である。然し對象の存在性に關する問題はプラトーンがこゝに取り扱ふことを意圖したものではなかつた。人は「バルメニデース」が一者と他者との、一と多との存在の問題を主題としてゐることを知つてゐるであらう。そこで一者に對立するところの他者若しくは多は、前期の對話篇に於て形相に對立せしめられてゐた影像ではなくして、却つて「テヘアエテーツス」の *μορφῆς* の基本の性質を有するものである。「分有は、基本が形相に單に従屬するものではなくして、形相と等しい權利をもつて自己の存在

を主張する時、始めて眞の問題となる。

それはともかく、プラトーンが爰に述べてゐるロゴスの三つの意味を見よう。最も完全なる知識がロゴスを伴ふ眞なる臆断であると言はれる時此のロゴスとは何を意味するか。(一)第一にそれは動詞と名詞とを用ひ、聲(φωνή)によつて自己の思惟を明白ならしむる(ἐπιφανή, *to ephanē*)ことである(206d)。此の意味に於けるロゴスは、眞實なる臆断を單に言葉で表現するにとゞまつて、新たなる知識の定義も前の定義と同じ運命に陥るであらう。(二)ロゴスはものを成り立たしめてゐる個々の基本を數へ上げることを意味する(206e)。戦車を成り立たしめてゐる基本を餘すところなく數へあげることが出来る人は、戦車の知識を有つてゐる人でなくてはならぬ。此れを綴と文字の例に適用してみるならば、綴を一々の文字に分割してそれを數へあげることが出来る人は、ロゴスを有つてゐるが、綴しかあげることが出来ない人は正しい臆断しか有つてゐないことになる。ところがテヘアエテートスと言ふ名を完全に綴ることが出来る人が、同じく「テヘータ」をもつて始つてゐるテヘオドロースの名を書く際には誤謬を犯すかも知れない。故に彼は正しい臆断を有つてゐるとは言はれるかも知れないが、知識を有つてゐるとは言はれない。ロゴスを「基本によつて全

體に至ること」(208c)と解釋しても、それを伴ふ眞實なる臆斷が知識であるとは言はれない。(三)ロゴスが有つ第三の意味は、問はれてゐるものを他の一切のものから區別する何か特徴をあげることである。約言すればそれは差異 (*Diaφορη, Διαφορῆς*) (208e, 209a)の記述である。けれどもロゴスを此のやうに解釋しても、眞實なる臆斷が知識であるとは言はれない。何となれば眞實なる臆斷に差異の記述が附加せられて知識となるならば、差異の記述が附加せられない臆斷は、如何なる差異をもふくまず、共通なるものを思惟することではなければならぬ。けれども差異が把握せられることなしには、如何なるものも正しく臆斷せられない。例へばテヘアエテートスを、眼と鼻と口とを有つた人間と考へることは、一般に誰れかを臆斷することであつても、特にテヘアエテートスを臆斷することではない。人が正しくテヘアエテートスを臆斷するためには、例へば彼の鼻が平たく、而もソークラテースの平たい鼻とは異つてゐる何等かの特徴を把握しなければならぬ。それ故に人がテヘアエテートスを正しく臆斷するためには、既に彼の差異を把握してゐなければならぬ筈である。然らば正しい臆斷が差異のロゴスを伴ふことによつて知識となると言はれる時、一體、何が附加せられるのであるか。我々は既に差異をふくんでゐるところの正しい

臆斷に、更に差異の正しい臆斷を附加するのであると答へることは出來ない。そこで「ロゴズを伴ふ」とは、差異の臆斷を意味するのではなく、差異の知識を意味するのであると解釋するならば、知識とは何であるかを問ふ人に、知識とは、差異の知識を伴ふ正しい臆斷である(210c)と答へなければならぬ結果になるであらう。そして此の答は更に差異の知識とは何であるかといふ問ひを呼び起さざるを得ない。それ故に「我々が知識を探ねる時に、それは——差異の知識であらうと或は何の知識であらうと——知識を伴ふ正しい臆斷であると言ふことは、全く愚かなことである」(210e)。かくしてこゝに解釋せられた三様の意味のロゴズが眞實なる臆斷に附加せられ、それも、それは結極知識の正しい定義とはなり得なかつた。だから「テヘアエテートスよ、感覺も、眞實なる臆斷も、眞實なる臆斷を附加せられたロゴズも知識ではあり得ない」(270a-b)と言はれてゐる。ロゴズを差異の知識と解釋することは、知識そのものが明確に定義せられない限り、循環論に陥らざるを得ない。此の循環を招致するものは差異の知識と解釋せられたロゴズであつた。今此のやうな知識を第三の知識と呼ぶならば、正しい臆斷と知識とを同一化するものも従つてこれを區別するものもこの第三の知識となる。そしてプラトーンは此の第三の知識が涯しない循環

を呼び起すが故に、正しい臆断と知識とを同一化することが出来ない^(一)と論じてゐる。さて此の結論は我々に有謬の臆断の把握の最後の論述を想起せしめる。そこに於ても結極「知識と無知識との知識が限りなく循環することが説かれてゐる。此の「知識と無知識との知識」も、循環をふくむことに於ては、今の差異の知識と同じ性質を有する第三の知識である。第三の知識が確立せられるならば、これによつて知識と無知識乃至知識と眞なる臆断との區別或は同一が證明せられるであらう。然し第三の知識が確立せられるためにはそれを基礎づける第四の知識が必要であり、かくして無限にそれを基礎づける背後の知識の連続が必要となる。知識を定義することを目的として出發した「テヘアエテーツス」の企は、終にアボリアに陥つたが、そのアボリアはかゝる循環論によつて構成せられてゐた。

(一) 本號六頁以下を見よ。「カハルミテース」にも「知識の知識」が論ぜられてゐるが、しかしこれは循環をふくまない。

ところで人は此れと同じ論理が「バルメニデース」に於ては形相と個物に適用せられてゐるのを見るであらう。^(二) 即ちアリストテレースによつて所謂「第三の人」として非難せられた論證は、この論理の發展である。^(三) 諸々の大なる個物が、それ自體によつてではなく、形相「大」を分有することによつてのみ大であり得るとすれば、形相「大」は何

によつて大であるか。それは更に新たに現れて來るところの「他の大の形相」を分有しなければならぬであらう。此の「他の大の形相」も亦更に他の形相を分有することによつて大となり、かくして形相は、決して一であるのではなくして「限りなく多數であること」になるであらう。此の分有の關係を模寫としても亦同じ循環が起り、絶えず新しい形相が、とどまることなく生ずるであらう。此の「バルメニデース」の第三の人のアポリアも、それがふくむところの循環によつて成立する。然し「バルメニデース」の論理は「テヘアエテーツス」のそれよりも遙かに精緻であり且つ巧妙であるが、その原理は全く同一である。このことはまた「テヘアエテーツス」が著作年代に於て「バルメニデース」に先立つことを暗示するであらう。「テヘアエテーツス」に於ける有謬の臆斷の結論も、眞なる臆斷の結論も、結極、私が第三の知識と呼んだところのアポリアによつて、否定的であつたが、しかし此の論理は更にプラトーン哲學の全般に亘つて支配してゐた *τὸ ἐπιπέδον* と *τὸ μέγεθος* とも名づくべき方法に基くものであらう。

(一) Parm. 132 a E 次の引用は「132 a」と「133 a」よりなされた。

(二) Metaphysica, 990 b 15 sq., 1039 a 2, 1059 b 8, 1079 a 13. Soph. elench., 178 b 30 sq., Frag., 1506 b 23. しかし「アリストテレス」が「形而上學」でなしてゐる非難は、「バルメニデース」を對象してゐるのではない。Ross, Arist. Met. Commentary,

この對話篇に於て提出せられた知識の三つの定義は、上來述べて來た如く、悉く否定せられた。積極的に知識とは何であるかを示すことは、今、ソークラテースがなすべきことではなかつた。「神から」(ἐκ θεοῦ) (210c) 彼が受けた使命は、青年に對して産婆術を施すことであつた。その上メレトースによつて起された告訴の辯明をなすために、法廷へ赴くべき時が來た。此の對話篇は、かくの如くして、何等積極的結論に達してゐないが故に、その意味でテイラーは「ソークラテース的對話篇」の型に屬すると言つてゐる。⁽¹⁾ プラトーン自身もこれが否定的に終ることを欲したであらう。⁽²⁾ 形相を對象としてゐた知識が形相論に疑惑を感じ、その對象を失つた時、知識は何を對象とすべきであるか、此の對象が明確に規定せられない限り、知識論は否定的結果に達せざるを得ないであらう。そこでプラトーンは存在に向つた。しかし存在の問題の前には「分有」(μέθεξις) の問題があつた。(完)

(1) A. E. Taylor, Plato, p. 347.

(2) A. Dies, Théséte, notice, p. 130.